

発達に違いのある子どもたち

市では、平成24年3月に「宇土市第2期障がい者プラン」を策定し、「障がいのある人、ない人にかかわらず だれもがいいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回は、発達に違いのある子どもたちがいいきいきと暮らせるまちを目指すため、子どもたちの特性について、市内で子どもの発達支援に取り組んでいるNPO法人「まいすてっぷ」から文章を寄稿していただきました。

周産期医療の目覚ましい発展とともに新生児の死亡率は減少してきたにも関わらず、発達に遅れや障がいを持って生まれてくる子どもたちの数は、社会的認知度が高まるにつれむしろ増加の傾向にあります。自治体の乳幼児健診での指導や、養育者が自主的に専門機関に相談されることも多くなり、早期から療育機関のサービスを受けているお子さんも増えてきました。療育機関は常に満杯で、多くは数カ月から1年以上の待機状態になっているのが現状です。

平成19年に「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられてから、支援学校や地域の小学校の支援学級、通級（通常学級に在籍し、必要に応じて個別指導）など、以前にも増して子どもの特性に合わせた選択が出来るよう配慮されてきました。早期療育を受けてきた子どもたちは、個の能力に応じた手厚い支援を求めて、入学時から支援学級を希望する件数も多くなっています。

しかし一方、平成24年12月に文部科学省でまとめられた調査結果では、通常学級に在籍する、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で困難を示し、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の数は、全体の約6.5%を占めると発表されました。この調査には支援学級に在籍する子どもの数は含まれていないので、トータルすれば、いかに多くの子どもたちが特別な教育的支援を必要としているのかを物語っています。

そういった子どもたちは、わざとではないのに叱責を受けたり、なぜ自分だけ理解できないのかわからなかったり、教室の中で周囲との違和感や劣等感に悩み、誰にも相談できずに困っていることも少なくありません。他の人と場面を共有し、気持ちを共感させる中で、通常コミュニケーション能力は自然に発達していきますが、脳機能の若干の違いがそれを阻害してしまい、本人の努力だけでは十分に相手の意図をくみ取れない、どうしても良いかわからないので笑って済ませてしまう、そのような子どもたちもいます。

その反面、脳機能の違いは通常の脳では考えつかない発想や、特定の分野に高い知能を持っていることがあります。世の中を変えてきた発明家や、コンピューターの開発者、私たちに夢と希望を与えてくれる映画監督や俳優、作家など、さまざまな分野で既に活躍している人々もいます。

私たち人間の脳は、あまりに緻密なものへと進化したがために、どの社会においても一定の割合でダメージを受け、働きの違う脳を持って生まれてくるのです。それを誰が担うかは誰にもわからず、また誰のせいでもなく、たまたま誰かが持って生まれてくるものです。その「たまたま」を担ってくれた子どもたちとその家族を、地域の一員として温かく受け入れ、育てていく力を持つ社会こそが、本当の人間社会であると思います。私たちの住む宇土市が、障がいという「違い」があっても、子どもたちが自分の能力を生かして社会貢献できる大人に成長するよう、見守り支援することの出来る地域社会であることを願います。

NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援 まいすてっぷより発信